

V 教育研究計画

1. 学校研究

(1) 研究主題

自分事として学び続ける中島っ子の育成 ～数学的な見方・考え方を働かせ、高め合う授業づくり～

(2) 主題設定の理由

昨年度は主題を「主体的に学び続ける子どもの育成～教師の見取りと支援の充実による授業づくりを通して～」とし、教材研究により教師が数学的な見方・考え方を正しくとらえ、個に応じた適切な支援を行いながら、自立した学習者の育成を目指してきた。

昨年度の成果としては、

【教師】

- 学習指導要領解説に基づき、数学的な見方・考え方を軸に据えた単元計画の作成や、目指す姿から逆算した評価問題の設定を行う教材研究のサイクルが定着した。
- 「学びタイム」等の部会交流を通じ、既習事項との系統性（縦のつながり）を意識した授業実践や、児童の思考の想定（A・B・C）に基づく見取りの意識が高まった。

【児童】

- 導入における必要感のある課題提示や、掲示物やICTを活用した思考の可視化により、解決に向けた見通しをもち、協働的に解決に挑む姿が増えた。
- 多くの学年で知識・技能の定着において高い到達率という確かな成果が見られた。一方課題としては、

【児童】

- ▲習得した知識・技能を活用して未知の課題に挑む際、自ら解決の道筋を立て、解決する力に個人差が見られる。
- ▲友達に一方的に伝えることが多く、自他共に考えを広げ・深めるといった、質のある学び合いに至っていない。

【教師】

- ▲知・技を活用してより深く思考させる場面を重視した単元づくりや、児童の実態による十分な見取りに依然として難しさを感じている。
- ▲振り返りの時間は設けたが、児童の振り返りの内容の吟味までには至っていない。

そこで、令和8年度は授業を教師主導の「他人事」から、児童一人一人の内発的な願いに基づく「自分事」へと昇華させることを目指す。児童が算数の本質に触れる中で自ら問いを見出し、図や式といった根拠を基に「だって！」と論理的に語り合いながら、納得解を求めて自らの思考を柔軟に更新し続ける姿を追求したい。その具現化に向け、本年度は以下の三本を柱として研究の重点にしていきたい。

①「教材研究の力」の向上

指導要領解説の読解を通して「数学的な見方・考え方」と「つきたい力」を明確に定義し、目指すべきゴールの姿と児童の実態との差を的確に見取る。この差を埋める単元デザインを行うことで、誰一人取り残さない基盤を整える。

②「教師の手立て」の精選

単なる話し合いに留めず、授業のどの場面で児童に「だって！」という根拠ある発言

をさせるか、そのための「揺さぶり」や「問い返し」を周到に準備するなど教師の出場を明確にしていく。思考を可視化し、比較できる構造的な板書や ICT 活用を計画的・効果的に組み合わせ、対話の質を深める。

③「中島っ子授業スタイル」の深化

上記二つの柱を土台とし、特に本年度は「導入・深い学び・振り返り」の一連の流れを意識した授業を展開する。知的好奇心を揺さぶる「導入」で自分事化し、根拠を紡ぐ「深い学び」を経て、学びの価値を実感する「振り返り」へと繋げていく。

これら三つの柱を連動させることで、児童が自らの学びをコントロールし、新たな問いへと向かう「児童主体の学び続けるサイクル」を確立したい。算数科の学びを通して、確かな根拠をもち、新たな展望を描きながら粘り強く挑戦し続ける「中島っ子」を育成していきたい。

(3) 研究の内容

<教材研究の力>

- 働かせたい見方・考え方を明らかにする
 - 学習指導要領を読解して数学的な見方・考え方を理解し、つけたい力の明確化を図る
 - 目指す具体の姿から、適切な評価問題を設定する
 - 適切なレディネステストの準備→個の状況を見取る
- 見方・考え方を働かせる単元・授業デザイン
 - レディネステスト等で児童の「実態」を把握し、目指すべき「ゴール」との差から単元計画を決める
 - 内発的動機付けを生む導入の工夫と準備
 - 児童の思考の流れを想定
 - C→B、B→Aとなるよう、個に応じた見取り・支援の準備
 - 「知識・技能」を生かす「思考・判断・表現」の授業の位置づけ
 - 見方・考え方に気付かせる発問の準備
- 教材研究の時間確保
 - 協働による学びタイムの活用(個人・ペア学年・全体)

<教師の手立て>

- 数学的な活動の重視
 - 知的好奇心を生む数学的活動の開発
 - 児童から引き出したい言葉を明確に(数学的な見方・考え方)
 - 図や式を根拠に「だって!」と言いたくなるように、数学的な活動と問い返しを指導案の段階で具体的に準備
- 学習形態の工夫
 - 児童の実態把握(個の状況、困り感)から、個々の考えを可視化し、アウトプット。
 - 個別・協働→自分で学習形態を選択できる子に

○板書の工夫

- ・思考の流れがわかる板書
- ・違いを比較できる板書
- ・ポイントの明確化→より良い考えや新たな見方・考え方への気づきを促す

<中島っ子授業スタイル>

① 「えっ、なんで？」から「やってみたい！」と自分事化する導入の工夫

- ・既習事項との「ズレ」や「違和感」に着目させた問題提示を行い、児童が解決の必要性を感じ、自ら問いを見出す「知的好奇心を揺さぶる導入」を具現化
- ・学習の見通しを持たせ、問題を具体的にイメージさせることで、すべての児童が「やってみたい！」と主体的に動き出す、学びの自分事化を図る。

② 「だって！」と根拠を持って語り合う深い学びの展開

- ・個別思考と協働的な学びを往還させ、数・式、図、表、グラフなどを行き来しながら、自分の考えを確かな根拠を持ってアウトプットする場を設定
- ・教師の意図的な「問い返し」により、児童が「だって！」と論理的に語り合い、友達との比較検討を通して、納得がいくまで自分の考えを更新し続ける質の高い学び合いを展開

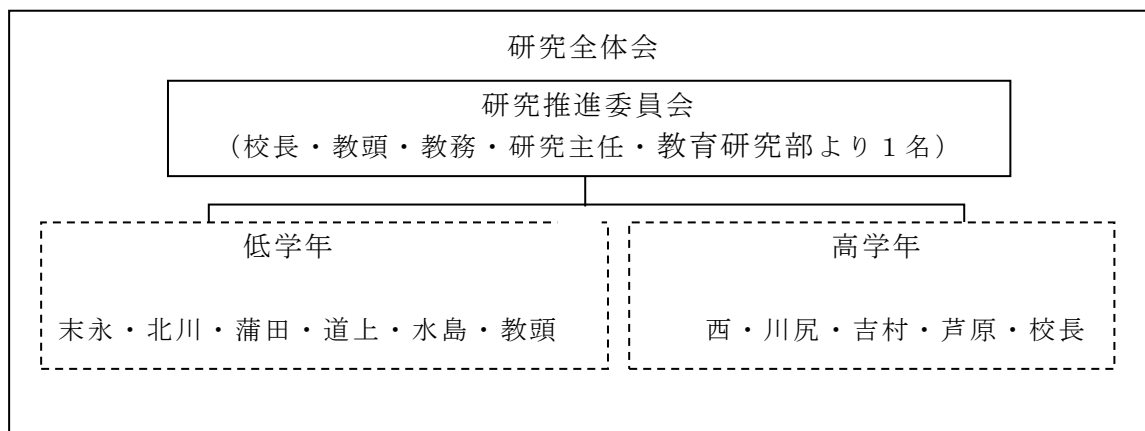
③ 「次はこうしたい！」と価値を実感するふり返りの充実

- ・キーワードの提示や視点を与えることで、働かせた「数学的な見方・考え方」を客観的に捉え、学びの価値を自覚化
- ・「学びを自己調整」する時間を確保し、本時の成果を「次はこうしたい！」「生活に生かせそう！」といった新たな展望や次時への意欲へとつなげる

(4) 研究方法

ア 研究組織

- ・研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、教育研究部より1名とする。



イ 研究の進め方

- 授業実践により、指導力向上を図る。
 - ・主事訪問時は、全体研究授業および授業整理会を実施する。
 - ・全体研究授業以外の学年は、学期に1回、単元全体による授業交流を行う。単元終了後、検証を行い、共有する。
- 外部講師や指導主事を積極的に活用し、指導の向上をめざして授業改善に取り組む。
- 計画的に先進校視察や他校の研究会などに参加し、研修報告会で成果を還元し校内研究に生かす。

全体研究授業

- ・計画訪問および要請訪問で実施する。
- ・単元計画→模擬授業→指導案検討

単元全体による授業交流（単元を公開し参観）

- ・全体研究授業を行わなかった学年が実施する。
- ・単元計画配布→単元公開→検証報告（研究全体会にて）

ウ 検証方法

- ・重点単元の評価問題
- ・学期末テスト
- ・単元末の振り返り